

Ⅲ 平城京の遺跡

1 左京一条三坊十五・十六坪 (6AFB-F~J 地区)

A 整地

奈良時代の平城京以前、この地には2基の古墳(平塚1・2号墳)が存在した。京の造営に際しては、古墳をふくむ地形の起伏をなくするため、削平なり埋立ての整地工事をおこなっている。奈良時代から平安時代にかけて、この地域が居住区域として活用された時期にもその時々の整地工事がおこなわれている。だが、廃都後におきた水田への土地利用の転換は、古代の生活面を著しく削平し、地貌を著しく変形している。以下、各地区ごとの整地の状況を北方から南方に向かって観察してみよう。

J地区 ウワナベ古墳の南外堤が発掘区の北辺に迫っている。東南部においては、耕土・床土を除去するとただちに地山面となり、古代の地表面は削平されている。黄褐色粘土の地山面は海拔73.85mである。発掘区の西辺では地山の直上に厚さ10cm内外の暗灰色砂質土が堆積する。整地層の残存したものであろう。この面での海拔高は73m、I地区では東方から西方に向かって次第に下降する地形を呈する。

旧地表の削平

I~G北地区 この地区には西面する帆立貝式の前方後円墳(平塚1号墳)と前方後円墳(平塚2号墳)が濠をめぐるして存在した。造営に際して、墳丘は削平され、濠は埋立てられる。濠を中心とする土層堆積の状況から、奈良・平安時代初期に3次にわたる整地がおこなわれていることが明らかである(fig. 5)。

第1次の整地は2基の古墳の周濠において観察できる。

平塚1号墳北濠では暗黒色砂土、灰色粘土、黒灰色粘土に大別される土層が、濠の堆積土と埋立てた土層である。部分的には層位をさらに細分することも可能であるが、いずれにせよこれらの埋土は濠の範囲内にとどまる。また、堤の高さまで埋立をおこなわないので、濠の範囲は窪地の状況を呈している。整地土の上面には若干の起伏があるが、海拔72.16~72.3mの間におさまる。濠の埋土には墳丘の盛土を利用したらしく、前方部では地山面が床土直下で出現する。前方部の北部と南部とでは高低差があり、SB470の後方にある東西方向の段落を境にして、北部では海拔73.5m、南部では海拔72.85mとなる。これは第1次の整地に係るものであろう。平塚1号墳南濠では葺石の下縁から暗灰色粘質土の整地層がはじまり、その上面は海拔71.9m前後である。ここでも濠の範囲が窪地を呈していたのである。平塚1号墳南濠と平塚2号墳北濠との間に在する堤では古墳時代の旧地表面に厚さ10~30cmの含礫茶褐色土を敷く部分もあるが、大半は古墳時代の地表面を削平した地山面である。この部分の海拔高は71.6m。

第1次整地

後述するように、平塚1号墳の前方部の西方部分は、古墳築成段階の盛土であり、古墳築成以前の溝(SD461)も検出されている。このようなことから、第1次整地は二段築が推測される前方部の上段と下段の一部におよんでいたことがうかがわれる。平塚1号墳西濠では、第1次の整地が明瞭でない。西方に向って傾斜する地形なので、もともと埋立てがおこなわれなかった可能性が強い。

平塚2号墳北濠では黒灰色粘土を主体に、木炭が混入する灰褐色粘質土からなる整地層が40～30cmの厚さで存在する。この場合も埋立後、濠の範囲は一種の窪地となる。海拔高71.35m前後。平塚2号墳の墳丘部分はおそらく水田に変更したときになされたとかんがえられる後世の削平が著しく、旧状をとどめないが、南に向って傾斜する。西濠にも暗褐色バラス土を用いて厚さ80～50cmの埋立整地をおこなっている。H南地区での南限で海拔71.5mである。南濠の埋立ては灰褐色バラス混り土、赤褐色バラス混り土でおこなうが、現在30cm内外の厚さをとどめるにすぎない。古墳の葺石すら残存しない状況であるから、かなり削平されているようである。海拔高は70.95m前後である。G南地区では整地土がまったく削平されており、平塚2号墳の南堤は痕跡すらとどめていない。

第2次整地 第2次の整地は第1次整地土の上に重なるが、多くの部分では第1次整地と同じく墳丘部分には及ばず、濠の範囲内の埋立てに終始している。

平塚1号墳北濠では、黄褐色粘土、含礫灰色砂土を用いて埋立てをおこなう。その下部にある灰色細砂土と灰色粘質土は整地とは関係なく、第1次整地面に堆積したものである。その上面は海拔72.2m前後の平坦面をなす。南濠では黄褐色粘質土で埋立て、上面は海拔72.3m内外の平坦面を呈する。西濠での第2次整地は不明瞭である。平塚2号墳北濠は黄褐色粘質土で埋立て、その上面は海拔71.6m前後である。西濠では暗褐色土で埋立てた痕跡をとどめるが、H南地区の南辺以南では後世に完全に削平されている。

第3次整地 第3次の整地は、墳丘と濠にわたる全域についておこない、その層は比較的厚い。

平塚1号墳北濠では、含礫白色砂が堆積する部分と赤褐色土・褐色砂質土の2層部分とがみとめられるが、いずれも第3次の整地である。現状での上面は海拔73.3m内外である。墳丘部分では黄褐色含礫土、南濠中央部分では暗褐色砂土を用いて整地をおこなう。墳丘部分では海拔72.5m、南濠部分では海拔72.4mと全体にわたってほぼ平坦面をなす。なお、この整地土のなかに平安時代の緑釉陶器片などが混在しており、平安時代初期の整地であることがわかる。H北地区でもI地区と同様の整地をおこない、平塚2号墳西堤付近の海拔高は、71.95m前後である。H南地区では、第3次の整地層をほとんどとどめないが、平塚2号墳前方部西半には厚さ15～35cmの灰褐色土による整地層が残っている。G北地区では整地層はまったくみあたらず、遺構はすべて地山で検出した。

G南・F地区 この地区での削平は著しく、整地層は残らず、バラス混り茶褐色土の地山面から遺構の検出をおこなう。海拔69.8m内外である。ただ、部分的には地山上に10cm内外の整地土をとどめる個所もあるが、層が薄くて北方地区の整地とは断絶しているため、前記のいずれの時期に相当するかは不明である。

以上のような3次におよぶ整地層にともなって遺構が存在するのであるが、整地時期を決定することが困難な遺構も多い。

B 遺構

遺構は調査区域の全域で検出したが、とりわけ I 南地区から G 北地区にかけての区域に集中する。発見した主要な遺構は、建物 28 棟、柵 5 条、井戸 5 基、溝 7 条、園池 1 である。その他に、中世以降の耕作にともなう溝、土壌などが存在したが記述の対象としない。以下、発掘区の北方から南方に向かって遺構の説明をおこなうこととする(PLAN 2)。

SB 430 (PLAN 3, PL. 4)

J 東地区。4 間×2 間 (9.50m×4.75m)、東西棟建物。柱間寸法は桁行、梁行ともに 8 尺の等小建物間。円形の小柱穴を地山面で検出。

SB 432 (PLAN 3)

J 東地区。2 間以上×2 間 (2.95m 以上×3.84m)、南北棟建物。建物の南は発掘区外にのびる。柱間寸法は桁行 5 尺等間、梁行 6.5 尺。ただし、妻側中央柱は検出されなかった。建物方位は北で西に振れている。円形の小柱穴を地山面で検出。

SB 437 (PLAN 3, PL. 4)

J 東地区。3 間×2 間 (5.4m×4.20m)、東西棟建物。柱間寸法は不揃いであるが、平均して桁行 6 尺、梁行 7 尺。円形の小柱穴を地山面で検出。

SB 440 (PLAN 3, PL. 4)

J 東地区。4 間×1 間 (6.9m×3.0m)、南北棟建物。柱間寸法は桁行北 3 間各 5 尺、南端間 8 尺、梁行 10 尺。円形の小柱穴を地山面で検出。

SB 441 (PLAN 3, PL. 4)

J 西地区。3 間×2 間 (4.85m×3.23m)、東西棟建物。柱間寸法は 5.5 尺等間。方形の小柱穴を地山面で検出。東妻は SD444 に接している。この地区で、唯一のまとまりのある建物であり、その方位はほぼ真北と一致している。

SD 444 (PLAN 3, PL. 4)

J 西地区。素掘りの溝。発掘区の北辺から 7 m ほど南下して西に曲って発掘区外にのびる。北辺の溝
J 区西限の南北溝とは別個のものとおもわれる。西端での幅 3.5m、深さ 0.5m で、底は比較的平坦である。上部から褐色砂質土、暗灰褐色砂質土、灰色粗砂土の 3 層が堆積し、各層には若干の奈良時代の遺物を包含している。地山面で検出。

SA 447 (PLAN 3, PL. 4)

J 西地区。SD444 の南側に位置する南北方向の柵。4 間分 (14.55m) を検出したが発掘区の南にのびる模様。柱間寸法は北端で 10 尺、その他の柱間寸法は 13 尺である。方形の小柱穴を地山面で検出。

SA 448 (PLAN 3, PL. 4)

J 西地区。3 間 (7.2m) 以上の南北柵で柱間寸法は 8 尺。南方の小柱穴 1 間と連なる可能性はあるが、柱間寸法がことなる。方位は北で東に振れ、円形の小柱穴を地山面で検出した。

SD 453A・B (PLAN 4, PL. 5)

I 北地区。東西方向に流れる溝。前後 2 回の改修がみとめられる。最初は幅 1.4m~1.8m の

素掘りの溝(SD453A)としてつくられ、後に幅0.5m前後で両岸に小杭を打込み側板を落しこむ溝に改修する(SD453B)、平塚1号墳北濠を東西に横断し、溝部分は付近よりも少しく隆起している。第2次整地面で検出。

SB 455 (PLAN 4, PL. 5)

I 北地区。2間×1間(3.6m×3.0m)、東西棟建物。柱間寸法は桁行6尺前後、梁行10尺。柱間が一定せず北で西に振れており、建物に想定するのは困難であるが、一応建物としてあつかう。方形の小柱穴を第3次整地面で検出。

SB 463 (PLAN 5, PL. 32-3)

I 南地区。5間×2間(9.75m×4.5m)、南北棟建物。柱間寸法は桁行南第1間5尺、南第2・第3間は各7.5尺、北2間分は12.7尺。梁行7.5尺。ただし、南端通り1間は廂で、北端間を5尺の廂に想定すると身舎は3間×2間、7.5尺等間となる。第1次整地面で検出。

SE 464 (PLAN 5, 17, 14)

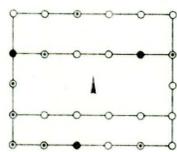
I 南地区。素掘りの方形掘形をとどめる。井戸枠は発見されなかった。掘形の上縁で1.6m×1.95m、現状での深さが0.6mの規模である。底には拳大の玉石を敷きつめる。泉のような施設であろうか。第1次整地面から検出。

SE 466 (PLAN 5, 17PL.19-3)

I 南地区。瓦を用いた小型の井戸。7734型式の軒平瓦4枚を円筒形に組合せて枠とする。直径30cm、深さ32cmの底部には小石を敷き詰める。井戸というよりは、湧水を集める施設である可能性の方がつよい。第3次整地面で検出。

SB 470 (PLAN 5, PL. 6)

廂付建物

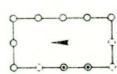


I 南地区。5間×4間(13.28m×10.92m)、南・北廂つき東西棟建物。柱間寸法は桁行9尺等間、身舎梁行8.5尺、南廂梁行8尺、北廂梁行11尺である。柱掘形は一辺1m前後の方形を呈し、直径1尺余りの柱根を残す柱穴が2穴ある。柱根はコウヤマキとヒノキである。建物の北半は平塚1号墳の前方部に、南半部は南濠にかかる。第2次整地面で検出した。なお、北廂側柱列の北3.5mの位置に柱筋と平行する段落があり、墳丘を切込んで建物敷地を削平した状況がうかがえる。

SB 471 (PLAN 5, PL. 7-1)

I 南地区。2間×2間(5.1m×3.6m)、総柱の東西棟建物。柱間は桁行8.5尺、梁行6尺。不定形の小柱穴を第1次整地面で検出。

SB 476 (PLAN 5, PL. 7-3)



I 南地区。4間×2間(8.4m×4.2m)、南北棟建物。柱間寸法は桁行7尺、梁行7尺。西側柱列の柱穴については直径15cm内外の柱根を2箇所残しているほか、検出できなかった。方形の小柱穴を第3次整地面で検出。

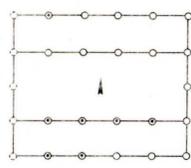
SD 477 (PLAN 5, PL. 7, fig. 5)

I 南地区。素掘りの溝で、発掘区の西辺から約8m東に流れたのち、東南に向きを変える。末端は削平されて不明であるが、SD485の南流するあたりで連結する可能性がある。幅1m内外、深さ0.3mの溝中には灰褐色粘質土が堆積し、部分的に木材の断片があったが土器などの

* 模式図凡例 ●柱根 ○柱痕跡 ⊙柱抜取痕跡 ○柱穴のみ ……推定 ▲は北をしめす。

遺物は皆無である。第1次整地面で検出。

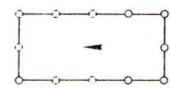
SB 480 (PLAN 6, PL. 8-3, 10)



H北地区。4間以上×4間(11.9m以上×11.9m)、南・北廂つき東西棟建物。東妻柱列はSD485に接近し、西方は発掘区外にのびるが、5間程度であろう。柱間寸法は10尺等間。一辺1m内外の方形掘形に、直径30cm前後の柱痕跡をとどめる。第2次整地面で検出。

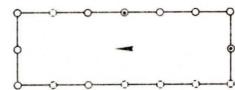
廂付建物

SB 481 (PLAN 6, PL. 11-1)



H北・I南地区。5間×2間(14.80m×5.3m)、南北棟建物。柱間寸法は桁行10尺、梁行9尺。北妻中央柱および東側柱の多くは後に掘り込まれるSD485によって破壊され、柱穴の痕跡をとどめない。西側柱南端間の2柱穴には、栗石の根固め石をとどめる。一辺80cm前後の柱穴を第1次整地面で検出。

SB 482 (PLAN 5, PL. 7, 10, 11)



H北・I南地区。6間×2間(17.8m×5.94m)、南北棟建物。柱間寸法は10尺等間である。SB418とは13尺の間隔を置いて東西に平行して存在し、南側柱筋を揃える。第1次整地面で検出。

SB 483 (PLAN 6, PL. 10-3)

H北地区。2間×1間(3.0m×2.0m)、南北棟建物。柱間寸法は桁行5尺、梁行6尺8寸程度。西南隅の柱穴に柱根が残る。東側中柱は未検出。第1次整地面で検出。

SD 485 (PLAN 5, 6, PL. 6, 7, 10, 12, 13, fig. 6)

I南・H北地区。I地区からH地区にかけて曲尺状に流れる溝。I南地区では西から東へ約17m流れて南に折れる。南流する溝はH北地区の中央を縦断するのであるが、南限付近で消えてしまうI地区での溝幅は2m内外で、層位も単純であるが、南流する部分では流路の変更があって、堆積土層からは大きく4時期に区別できる。

中央の大溝

SD485Aは最初につくられた溝で、第4層の灰色粗砂の堆積によって埋まる。南流が開始するあたりから平塚2号墳を画する堤までの間は幅1.2m内外で流れ、堤の部分では2本に分流して各々の幅を40cm内外に狭め、平塚2号墳の北濠に重なる付近では、また1本に合流して南下する。このあたりの溝中には黒色粘土が堆積する。平塚2号墳前方部西北隅の葦石を流水が破壊している。

SD485Bは、H北地区の北辺付近までSD485Aの流路を踏襲、それ以南では東方の溝を廃して西方の溝を拡幅する。この時期には溝の両岸に灌木を利用した杭を密に打込み、木枝や板をからめて護岸施設をととのえる。

溝中には黒色粘土や褐色砂土などが複雑に堆積し、各種の遺物が多く存在する。

SD485CはSD485Bの流路をほぼ踏襲するが平塚2号墳の北濠で東方に著しく氾濫し、炭化物や遺物を含む砂質土や粘土が広がる。

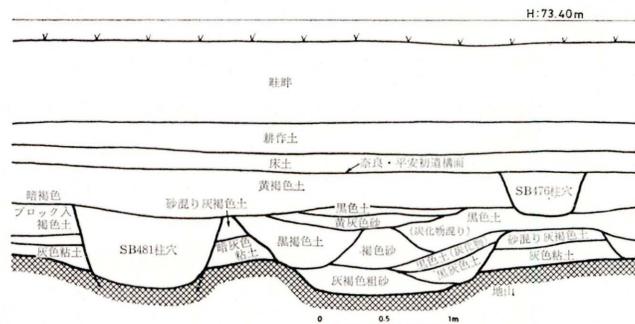


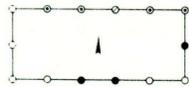
fig. 6 SD485土層図

SD485Dは、SD485Cで拡大した東方部分が窪地として残り一種の水溜りの状況を呈する。
 溝の年代 以上、4小期に細分できるSD485は第2次整地面から検出され、第3次整地の段階では完全に埋立てられている。なお、SD485Aは元来はSD477の下流であり、その東西方向の流路は時期的に下る可能性がある。出土遺物には和銅の年紀をとどめる土器、木簡などがあり、* 奈良時代初期の遺構であることがわかる。

SB 487 (PLAN 6, PL.10)

H北地区。2間以上×2間(5.4m以上×5.4m)、東西棟建物で西側は未発掘地区にかかる。柱間寸法は9尺等間。第1次整地面で検出。SB480・SB482の柱掘形を切込む。

SB 490 (PLAN 6, PL.11)



H北地区。4間以上×2間(11.8m以上×5.9m)、東西棟建物であるが、西側は未発掘である。柱間寸法は10尺等間。一辺1.2m前後の方形の掘形で、柱根が3本残存した。いずれも直径36cm前後のヒノキ材。第1次整地面で検出。

SE 495 (PLAN 6, 17, PL.10, 19)

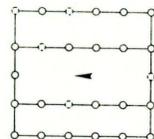
石敷の井戸 H北地区。平塚2号墳の北濠西北隅に掘込んだ方形の井戸。掘形は上縁で一辺1.8m、底部で0.8m×0.95m、深さ3.5mの規模をもつ、底には井戸枠の残材があり、枠板の大半は抜取られているが、北辺の一部に辛うじて残存する。それによると、掘形の各辺に幅20cm内外の板6枚を縦にならべ、内側に一辺6cm内外の角材で方形の枠を組んで四壁を固定する。現在、板のもっとも長いものは1.45mであり、本来は井戸の上縁までに2段ないしは3段を重ねたものようである。井戸からは土器、木器などが出土した。

井戸掘形の北西に、井戸の周囲に敷詰められた石敷面の一角が残存する。それは人頭大の河原石を敷いたものである。井戸掘形の中軸線から復原すると、元来は一辺3m内外の石敷面であったことが推測できる。第1次整地面で検出。

SB 498 (PLAN 6)

H北地区。3間×2間(8.1m×2.6m)、東西棟建物。柱間寸法は桁行9尺、梁行4.3尺。確認した5個所の柱穴のうち、3個所に柱根が残存。方位は東で南にふれるが、検出状況からしてSB487と同期とかがえられる。

SB 501 (PLAN 7, PL. 9)



H北地区。5間×4間(11.3m×10.0m)、東・西廂つき南北棟建物。身舎は7.5尺等間で、廂の出は東廂8.5尺、西廂10尺。第3次整地面で検出。I南地区のSB476とは身舎桁行の柱筋を揃えて南北に二棟の間隔は7尺でSB476の桁行柱間と同じである。また、SB476の東面北第2柱間に対応して、東方8.5尺の位置に検出した2個の小柱穴をSB476の廂と考えれば、SB501の東廂と同じ出をもつ。SB476の西廂を検出していないが、SB476とSB501は一棟の建物として、10間×4間、東・西廂つき南北棟建物となる可能性が大きい。ただし、柱行中央で間仕切られ、北と南とでは桁行の柱間寸法が異なる。

SB 502 (PLAN 7, PL. 9)

H北地区。2間×1間(4.8m×3.6m)、南北棟建物。柱間寸法は桁行8尺、梁行12尺。第3

* 堆積土から4時期に区別しえたが、出土遺物は層位と必ずしも対応していない。それは水流に

よって遺物が攪拌されている部分が比較的広範囲におよぶからである。

次整地面で検出した。

SB 504 (PLAN 7, PL. 9)

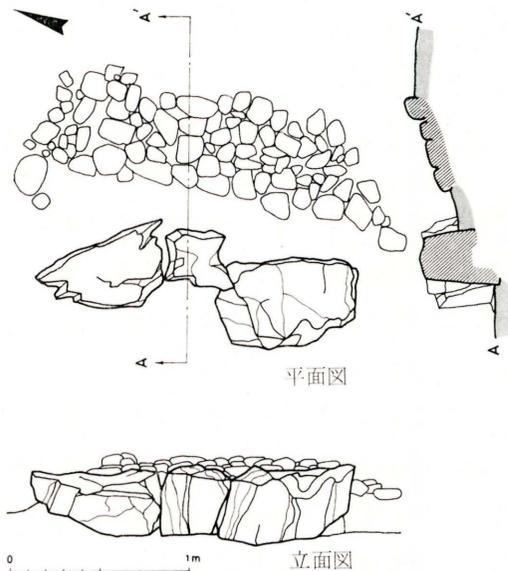
H北地区。5間×2間(13.8m×5.4m), 東西棟建物。柱間寸法は桁行で中央間10尺, 他は9尺。梁行は東西の妻中央柱を検出していないが, 9尺2間であろう。方形の小柱穴を第3次整地面で検出。柱穴の切合関係から, SB501よりも新しい。

SB 510 (PLAN 8, PL. 14)

H南地区。3間×2間(8.85m×4.72m), 東西棟建物。柱間寸法は桁行10尺, 梁行8尺。一辺1.4mの方形の掘形で, 柱痕跡から直径30cm前後の柱が想定できる。平塚2号墳前方部のほぼ中央に位置し, 上部に削平をうけており, 整地時期に属するか不明。

SG 520 (PLAN 8, PL. 15, 16, fig. 7)

G北地区。石組を配置した庭園遺構。平塚2号墳の周濠西南隅を利用する。東岸には前方部の斜面と葦を利用して, 洲浜を造成する。これを背にして, 均衡よく配置された庭石が6石ある。それらは東南から西北方向, 約6mの間に3石ずつ2組にわかれる。東南の1組(1・2・3号庭石)は, 岩石の片理による波状の褶曲を巧みに生じたもので, 中央に小型の石を立て両脇から大型の石で狭む。西北の石組(4・5・6号庭石)は少しく原位置から移動しているようであるが, やはり小型の石を狭んで大型の石を置く。庭石には根石を詰めるものも



庭園

あるが, 多くは地山に直接据付けている。池の北東岸以外については不確実であるが, 土層の観察によって東西18m, 南北10m内外の規模で, 岸が複雑に出入する園池が想定できる。池は粘土質の地山を直接に底とし, 砂利などを敷いた形跡はない。石組の状況から判断すると水面はおおよそ海拔70.4m内外となり, 池の深さは23cm前後である。池には第3次整地土に相当する褐色系のバラス混り土が堆積していること, 第1次整地層を掘込むことなどから, 第1次ないしは第2次の整地時期に遡る。1・2・3号庭石は黒雲母石英質片麻石, 4号庭石は粗粒両雲母花崗岩, 5号庭石は細粒両雲母花崗岩, 6号庭石は石英質片麻岩で, 産地は奈良市高円山周辺に推定できる。古墳の葦石は大半がチャートで, それに両輝岩, 安山岩, 片麻岩, 花崗岩, 石英斑岩などを混える。奈良坂付近の洪積層中の礫石を利用したのであろう。*

庭石の種類

SE 525 (PLAN 8, 17, PL. 20)

G南地区。浅い方形の井戸。掘形の上縁は3.5m×3.3mのほぼ方形を呈し, 深さは0.6mである。掘形の四周内側に添う40cm幅の部分河原石で敷き詰める。石敷面の上面は掘形の上縁から約20cm下降し, およそ25°の角度がある。石敷面の内縁には少しく大型の石をならべる。この内側に木枠が組まれていたか否かについては不明である。整地時期不明。

* 庭石の岩種と産地の鑑定は奈良教育大学教授梅田敏見氏に依頼した。庭石の番号は南東か

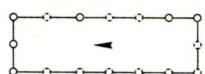
ら北西に向って1・2・3の順でよぶ。また, 発掘後石組は平城宮跡資料館へ復原移転した(fig. 2)。

SD 527 (PLAN 8)

第1次整地土下の遺構

H北地区。南北に流れる素掘り溝。前後2時期にわかれる。SD527Aは下層の溝で、幅は約3m、深さ20cm。バラス混り暗褐色砂が堆積し、少量の土器片をふくむ。SD527Bは上層の溝で、幅1.8m、深さ20cm内外、黒色粘質土が堆積するが遺物はない。いずれも第1次整地土の下で検出し、平塚2号墳西濠の堆積層を掘込んでいる。北方はSD485Aに関連するようである。南方は発掘区外にのびる。

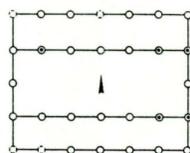
SB 528 (PLAN 6)



H地区。6間×2間(15.0m×4.5m)、南北棟建物。柱間寸法は桁行の北2間9尺、南4間8尺、梁行7.5尺、この建物位置でのH北区とH南区の高低差は40cm余りあって、H南区の柱穴残存状況は良くない。方位は北でやや東に振れる。第1次整地面で検出。

SB 530 (PLAN10, PL.17)

廂付の建物



G南地区。6間×4間(14.4m×11.4m)、南・北廂つき東西棟建物。柱間寸法は桁行8尺、梁行9尺、廂10尺。北廂は東から2間分を検出し、未確認であるが西にのびる可能性がある。身舎では一辺0.9m内外の方形柱穴で、廂の柱穴は小さく不整形である。地山面で検出したのであるが、この建物の掘形はSB550、SB551の掘形をきりこんでいる。

SE 535 (PLAN10, 17, PL.20-2)

G北地区。方形の井戸。掘形の上縁で一辺1.2mの方形を呈し、深さは0.25m内外で浅い。北辺に木製の側板2枚が残存する。側板は幅44cmで上部は腐食している。底には拳大の礫を敷く。平塚2号墳の南濠整地土を掘込んだものであるが、時期は不明。

SE 545 (PLAN10, 17, PL.20-1)

曲物の井戸

F西地区。曲物を枠とする円井戸。上縁で長径1.2m、短径1.0mの楕円形掘形を掘り、底に直径70cm、高さ30cmの曲物の枠を据付ける。掘形の上縁から底までの深さが約0.65mであるから、本来は円形の曲物を2段重ねにしていたのであろう。底にはバラスと木炭を敷詰め、埋土から和同開珎と須恵器の大甕の破片が出土した。地山面で検出。

SB 550 (PLAN10, PL.17-3)

G南地区。3間×2間(4.8m×3.6m)、南北棟建物。柱間寸法は不揃いである。小型の円形柱穴。東側柱の1穴がSB530の柱掘形によって切込まれている。地山面で検出。

SB 551 (PLAN10, PL.17-2)

F西地区。4間以上×1間(10.03m以上×4.13m)、東西棟建物。西側は未発掘。柱間寸法は桁行8.5尺、梁行14尺。一辺1m内外の方形柱穴に直径30cm前後の柱痕跡がある。北側柱穴はSB530によって切込まれている。地山面で検出。

SB 552 (PLAN10, PL.18)

F西地区。3間以上×1間以上(6.3m以上×2.1m以上)、南北棟建物か。柱間寸法は7尺の等間。一辺1m内外の方形柱掘形がSB553とSA554の柱穴を切込んでいる。地山面で検出。

SA 553 (PLAN10, PL.18)

F西地区。東西方向に延びる柵で、4間分(8.5m)を検出した。東方にはのびないが、西

方にさらに延長する模様。柱間寸法は7尺等間。直径40cm前後の円形柱穴。SA554の柱掘形を切込んでいる。地山面で検出。

SA 554 (PLAN10, PL.18)

F西地区。東西方向に延びる柵。6間分(14.4m)検出したが、西方に延長する模様。柱間寸法は8尺等間。一辺80cm内外の方形柱穴で、直径25cm内外の柱痕跡がある。地山面で検出。

南北を画する柵

SB 555 (PLAN10, PL.18)

F西地区。3間×2間(6.3m×3.0m)、東西棟建物。柱間寸法は桁行7尺、梁行5尺、直径45cm内外の円形柱掘形。SA554の柱掘形を切込んでいる。地山面で検出。

SB 556 (PLAN10, PL.18)

F西地区。1間×1間(2.7m×2.7m)、直径50cm以下の不整形柱穴。地山面で検出。

SB 557 (PLAN10, PL.18)

F西地区。2間×1間(3.6m×2.4m)、南北棟建物。柱間寸法は桁行6尺、梁行8尺。一辺60cm内外の方形柱掘形に直径20cm前後の柱痕跡がある。地山面で検出。

SA 558 (PLAN10, PL.18)

F西地区。東西方向に延びる柵。4間分(8m)を検出したが、さらに西方に延長する模様。方形小柱穴。地山面で検出。

SB 559 (PLAN10, PL.18)

F西地区。4間×2間(10.5m×3.3m)、総柱、南北棟建物。柱間寸法は桁行北・南端間10尺、中2間7.5尺、梁行西柱間5尺、東柱間6尺。不整形の小柱穴。地山面で検出。

総柱建物

SB 560 (PLAN10, PL.18)

F西地区。4間×2間(9.6m×4.2m)、東西棟建物。柱間寸法は桁行8尺、梁行7尺。円形の小柱穴。地山面で検出。

SB 561 (PLAN10, PL.18)

F西地区、3間×2間(6.3m×4.5m)、東西棟建物。柱間寸法は桁行7尺、梁行7.5尺。一辺50cm前後の小方形柱穴である。なお、東西の妻中央の柱は畦畔に重なり検出できなかった。地山面で検出。

SB 563 (PLAN10, PL.18)

F西地区。2間×1間(3.0m×2.1m)、南北棟建物。柱間寸法は桁行5尺、梁行7尺。不整形の小柱穴。SB561に重なっている。地山面で検出。

SB 565 (PLAN10, PL.18)

F西地区。4間×2間(9.0m×4.2m)、東西棟建物。柱間は桁行7.5尺、梁行7尺。北面には6尺の廂を推定しようが、西端の柱穴のみ検出するにとどまり、他は畦畔下のために未確認。不整形小柱穴。SB560に重なって建てる。地山面で検出。

SD 566A・B (PLAN10, fig. 8)

F西地区。素掘りの南北溝。SD566Aは発掘区東辺に添って南流する溝で、北方は畦畔下に延長し、南方は発掘区外にのびる。東岸は検出していない。現状での幅は0.7mで、遺構検出面からの深さは0.5mである。内には、上から黄灰色粘土、灰

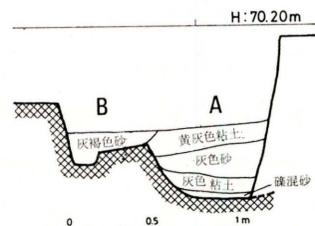


fig. 8 SD566土層図

色砂質土、灰色粘土、礫混り砂土の4層が堆積し、第4層には若干の土器・瓦片をふくんでいる。SD566BはSD566Aの西岸に重複する溝で、発掘区の東辺畦畔に添ってSE545付近から蛇行して南下する。灰褐色砂土が堆積し、遺物を欠くが中世以降の溝である。

H南地区西方トレンチ (PLAN9)

西方へ傾斜する地形

H南地区の西方に設定したトレンチでは、東方から西方に向ってゆるやかに傾斜する地形を検出した。床土下で暗褐色バラス土の整地層を検出したが、厚さ10~40cmであり第3次整地土層に対応する。この整地土と黄褐色粘質土の地山との間に厚さ10cm内外の灰黄色粘質土層があるが、これは地山の汚れともみられる。トレンチ内の遺構としては、H南地区に接する付近で、若干の小柱を検出し、所々で南北に走る溝の存在をしる程度で、とくに東方の建物群を画するような遺構はない。

F西地区西方トレンチ (PLAN10)

FaトレンチではF西地区の建物群に連続するであろう柱穴の検出をおこなったが、Fbトレンチでの遺構は皆無であり、建物群はこの付近にまでおよんでいないようである。

以上、6AFB-F~J地区発見の遺構をのべたが、それらを整地時期別に分類し表示する。

(地区) (整地)	J	I北	I南	H北	H南	G北	G南	F西
1次			SB463 SE464 SB471 SD477	SB481 SB482 SB483 SD485	SB487 SB490 SE495 SB498	SD477 SD527A・B SB528		
2次		SD453A・B	SB470	SB480	SD485	SG520		
3次		SB455	SE466 SB476	SB501 SB502	SB504			
不 明	SB430 SB432 SB437 SB440 SB441 SD444 SA447 SA448					SB510	SE535 SE525 SB530 SB550	SE545 SB551 SB552 SA553 SA554 SB561 SB562 SB555 SB563 SB556 SB565 SB557 SD566

Tab. 2 6AFB-F~J地区整地時期別遺構分類表

2 東三坊大路 (6AFB-A~F地区)

この地区の遺構は上部が削平され、耕作土下の床土を除去するとすぐに砂質系土壌の地山面に達する。部分的には砂利などの整地土をとどめる個所もあるが、おおむね遺構は地山面で検出した。遺構には道路・側溝などの古代のものと、それらに重複する中世から近世に至る溝などに大別できる。ここでは、必要以外は古代の遺構に限ってのべることにする。

SX 600 (PLAN11~16, PL.1, 21~24)

東三坊大路

B地区からF東地区に至る267mの間で、砂質系の地山からなる平坦面を検出した。この面には中世以降の南北に流れる溝などが無数に重っているが、古代の柱穴などは検出されず、一部に砂利敷の整地面をとどめている。それは水田地割から復原する東三坊大路の想定路面敷と一致し、条坊施行時における大路に比定できる。A地区においては、後述するSD650A・Bお

よびそれ以降の氾濫が著しく、路面の痕跡をとどめず、推定南一条大路との交叉状況などについてはまったく把握することができなかった。大路の路面は旧地形に従い、北方から南方に向かって緩やかに傾斜する。すなわち、発掘区北端のF東地区北辺での海拔高70.2mに対し、276m南方のB地区南辺では海拔高65.8mと4.4mの高低差がみとめられる。A～E地区では後述の東側溝SD650を検出することによって路面の東限が判明しているが、西側溝の存在を積極的に示す遺構は検出できなかった。いま、西側溝に比定しうる遺構としてはSD570とSD566Aとがある。SD570はSD650の西方約15mの地点に位置する南北に流れる溝で、中世以降とみられる堆積土があるが、西側溝の流路を踏襲するものとかがえる。SD566AはF西地区の東辺にある畦畔下に存在する溝である。時期的には奈良～平安時代に比定できる堆積状況を示すが、発掘範囲が狭く直ちに路面に添って南北に流れるとは断言できない。前者の場合は路面の幅員50尺、後者の場合ならば幅員75尺となり、SD566Aが西側溝である可能性がよい。

西側溝の位置

SD 650 (PLAN11～16, PL.1, 21～24, fig.9)

A～E地区にわたる南北約240mの間で、北方から南方に流れる溝を検出した。溝は時期をことにする2条の溝が上下に重なる状況で検出した。ここでは時期の古い下層の溝をSD650Aとよび、新しい上層の溝をSD650Bとよぶことにする。^{*} 2条の溝はE地区北半では完全に上下に重なり、それ以南ではSD650Bが西側により、B地区南半部以南では流路を別にしていく。

SD650Aは幅2.5m前後、残存路面からの深さ1.1m内外の素掘溝である。E地区での横断面は底部の狭いV字形に掘るが、D地区以南では底部の幅が広がり逆台形の断面を呈している。路面SX600の南方への傾斜と呼応し、底も北方が高く南方が低い。すなわち、溝底の海拔高はE地区で67.2m、その南方約180mを隔てたB地区北辺では64.68mとなり、2.52mの高低差がある。幅員は必ずしも一定せず、一時的に水溜りとなる個所では若干幅員を広げている。例えばSD601、SD635などの合流点や上流、下流などそれぞれの場所に応じて溝の堆積状況は変化している。しかしながら、基本的には下層に灰色粗砂質土、褐色砂質土などが25～40cmの厚さで堆積し、その上に黒灰色粘土が20cm前後の厚さで堆積し、さらにまた灰色砂質土などが堆積する。このような状況は、流れの速い時期には砂質系の土砂が堆積し溝が埋まり、流れが緩慢になる時期になると粘土質系の土砂が堆積し、ついには溝の機能を消失する状況を示している。堆積土のなかには土器・陶器・瓦・木器など多数の遺物が含まれており、ある部分では土砂の量よりも遺物の量が多い状況を示した。遺物の年代は平安時代の様相を呈し、天長5年(828)の告知札が存在することから、平安時代初期の遺構であることがわかる。奈良時代とみられる遺物がまったくなくはないが、それらは、溝底に貼りついたような状況で検出された。奈良時代末期から平安時代の間、大規模な浚渫工事がおこなわれているとみるべきである。

古い時期の溝

SD650Bは、幅2m前後、残存路面からの深さは0.5～0.9mで、SD650Aの埋没後に掘り開いたものである。底部は平坦面をなす部分もあるが、一般的には不整形の凹凸面をなす。この溝もSD650Aと同じく北方が高く、南方で低い。D地区北半からC地区にかけての区域では、約40cm前後の間隔をおいて雑木の乱杭を打込み、河原石なども併用して護岸施設としている。D地区における典型的な堆積状況からすれば、下層に褐色系の粗砂質土が15cm内外の厚

新しい時期の溝

^{*} 発掘の段階では、SD560B上部の黒色粘土堆積を区別し、上・中・下の3期に区別した。そ

後の検討を通じて、この上・中は1時期内に包括されることが判明した。

さで堆積し、その上部に黒色粘土が30cm前後の厚さで堆積している。上部の黒色粘土は溝が東側に氾濫したのちに堆積したもので、SD650Aの上部を覆う。この溝からも多数の遺物が発見され、下部の時期を寛平大寶(890年)の頃、上部を延喜通寶(907年)の頃に比定することが可能である。

坊内からの排水

D地区の北辺付近とC地区の南辺付近に東方から流入する2条の溝(SD601, SD635)が、約115mの間隔をおいて存在する。いずれも素掘の溝で、東方の坊内からの排水路であろうが、今回の調査範囲では

存在を確認するとどまり、性格はさだかでない。

SD650A・BはA地区において著しく氾濫し、この地

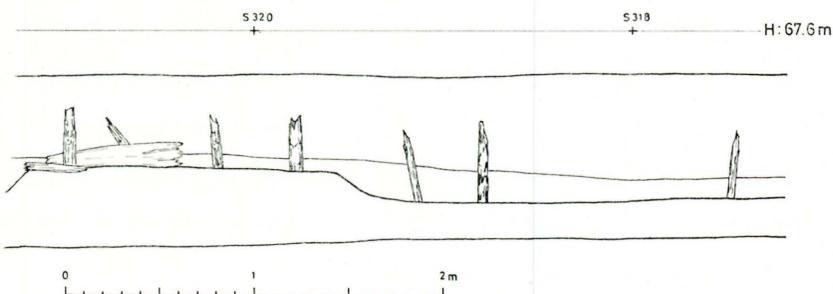


fig. 9 SD650Bの護岸状況

区を沼状の湿地にかえている。その範囲は広く、県道の南側で設定した6AFE区にもおよんでおり一条大路との交叉部分などはすでに流失し、痕跡すら残存しなかった。

SD 611 (PLAN14, PL.23)

南北溝

D・C地区の東方拡張地区で検出。南北に流れる幅1.6m前後の素掘溝である。溝には小石が混入する灰黒色土と白色砂質土が堆積している。前者は厚く上層にあり、後者は薄く底に貼りついている。この付近は削平が著しく溝の深さは10cm内外にすぎず、溝に堆積する遺物は少なかったが、中世以降の灯明皿などが混在していた。東岸に平行して、約50cm前後の間隔をおく雑木の杭を打込む。C地区ではこの溝に直交する溝が西岸にとりついている。西方に平行して存在するSD650AとSD611との心心距離は約7mあり、その間に介在する南北に延びる畦畔を築地に仮定すると築地の東側の雨落溝に想定することも可能である。* しかしながら、堆積土に中世の遺物が混入しているので、ここではそのかんがえを保留しておく。

SA 620 (PLAN14, PL.23)

南北柵

D・C地区の東拡張区域で検出。南北にのびる柵で、31mにわたって存在する。C地区で約8.4mの開口部をおいて北に7間、南に1間分の柱穴を検出したが、それぞれさらに延長するようである。柱間寸法は開口部の北第1柱間13尺、その他は平均8尺である。SD650Aとの心心距離は40尺、SD611との心心距離は約5m前後(約17尺)となる。開口部には柵と柱筋をそろえる3個の小柱穴があるが、柵と時期を同じくするか否かについては判然としない。

SB 615 (PLAN14, PL.23)

D地区東拡張区。桁行2間以上、梁行2間の南北棟建物とかんがえる。西側柱は検出されなかったが、築地の存在を仮定して、西側柱は築地を利用したものとかんがえる。柱間寸法は桁行7尺、梁行10尺。

以上の遺構のほか、通称一条通以南でもトレンチを設定したが、沼状の湿地が広範囲に広がる状況を確認したにすぎず、遺物の出土はまったくなかった。

* A地区の南辺に位置する畦畔に東西方向のトレンチをいれ精査したが、畦畔下に築地の痕跡を見出すことはできなかった。しかし、柱穴も

存在していないので、かつて存在した築地が後に削平されたものともかんがえられる。